

イエスのことば 第 70 回 ラザロのよみがえり

イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」（ヨハネ 11：25～26）

□文脈の確認

1. イエスの公生涯 3 年半。起承転結の四部構成に分け、時間順でイエスのことばを学ぶ
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から、翌 27 年春のメシア宣言を経て、宣教開始まで
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける
 - (3) 転：紀元 29 年春から約 1 年、弟子訓練の時期
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月、エルサレム入城・十字架・復活、復活から 40 日後に昇天
2. 転の部
 - (1) 紀元 29 年春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行。目的は休息と弟子訓練
 - (2) 秋 10 月の仮庵の祭りから、冬 12 月の宮清めの祭りまでの約 3 か月
 - (3) 翌年 4 月 1 日までの約 3 か月・・・記事は、全部で 15
3. 15 のうちの 5 番目の記事、**【富について】**（ルカ 16 章）

イエスは「不正な管理人のたとえ話」を語り、たとえ話の中に出て来る金持ちの富を「**不正の富**」と言った。律法では同胞から利息をとってはならないと命じられているのに、パリサイ人たちのような金持ちたちは、抜け道を作って自分たちの富を増し加えていたからである。イエスは、「人は神と富との両方に仕えることはできない」と教えた。
4. イエスの話を聞いていたパリサイ人たちは、イエスをあざ笑っていた。裕福であることは神の祝福を受けているしるしであって、自分たちは正しいと誇っていたからである。そこでイエスは、ある金持ちと貧しい人ラザロが死後どうなったか、実話をもって警告した。**死後の世界の行先を決めるのは、金持ちだったかどうかではない。神のことばに耳を傾け、神を信じたかどうか、である。**
5. この実話の中で、金持ちだった男の死後の行先は、よみの中の**苦しみ**の場所であった。彼は苦しみの中で思った・・・**【残した家族にはこんな苦しい場所に来るなど言いたい。そうだ！ ラザロをよみがえらせてもらって、自分の今の状況を家族に伝えてもらえるなら、不信仰な家族も考えを改めるだろう】**・・・彼はこの求めを、**義人たちの場所**にいたアブラハムに、大声で言った。アブラハムは答えた。「**モーセと預言者たち（＝旧約聖書）に耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。**」（ルカ 16：31）
6. **今回は、7 番目の記事**・・・別人であるが、名前は同じ、ラザロという人がイエスによって死人の中から生き返ったという出来事である。アブラハムが言ったとおり、この奇跡を見聞きしてもなお、金持ちの指導者層はイエスを認めようとしなかった。

ベタニア村の

マルタの家族構成

□アウトライン ラザロのよみがえり (ヨハネ 11 : 1～53)

- A. ラザロの死 (1～17 節)
- B. マルタとの対話 (18～27 節)
- C. マリアとの対話とラザロのよみがえり (28～44 節)
- D. ユダヤ議会はこの奇跡を無視した (45～53 節)

姉	マルタ
妹	マリア
弟	ラザロ

A. ラザロの死 (1～17 節)

1. ラザロ重病の知らせ、使いの者に対するイエスの返答

1～3 節 さて、ある人が病気ににかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

- 主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐった・・・後日の出来事【イエスが十字架にかかる 2 日前、シモンの家にて】(ヨハネ 12 : 3、マタイ 26 : 6～7)
- イエスのところ・・・このときイエスは、ヨルダン川の東側、ペレヤ地方に滞在 (ヨハネ 10 : 40)。ユダヤ地方のベタニアへは、ヨルダン川を渡れば、さほど遠くない距離。
- あなたが愛しておられる者・・・5 節には、次のように記されている。

5 節 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

イエスが以前にマルタの家に滞在したときの記事 (ルカ 10 : 38～42)

イエスのことば 第 58 回 主との交わり

4 節 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。」

- このイエスのことばは、マルタとマリアの姉妹にイエスの返答として使いの者に託された。

2. しかし、イエスはその日は出発せず、さらに二日とどまられた

5～6 節 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

3. イエスがラザロの病気の知らせを受けても行こうとしないのは、弟子たちは当然だと思っていた。ユダヤ地方に行くのは危険だからである。ところが、知らせを受けた日から四日目に、イエスが「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言ったので、弟子たちは反対した。

7～10 節 それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。弟子たちはイエスに言った。「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです。」

- この世の光・・・太陽を指すが、仮庵の祭りではイエスはご自身を「世の光」とあると言った。太陽が輝いている昼間に歩けば、つまづくことはない。同様に、この世の光であるイエスといっしょにいるなら、安全である。だから、ユダヤ地方に行くことを心配することはない、という意味。

4. イエスが出発を遅らせた理由

11～13 節 イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。

14～15 節 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

16 節 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

17 節 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。

- すでに四日たっていた・・・当時のユダヤ人の間では、死者の霊は体から離れたあと、しばらくの間はこの世にとどまり、3 日目以降に死後の世界「よみ」に行くと考えられていた。よって、すでに 4 日目になっていたということは、蘇生の可能性はなくなったという理解。

B. マルタとの対話 (18～27 節)

1. イエスが向かっているという知らせを受けて、マルタは村の外まで行ってイエスを出迎えた。マルタはイエスに会ったと、なぜすぐに来てくれなかったのかと不満を言った

18～20 節 ベタニアはエルサレムに近く、15 スタディオン（約 3 キロメートル）ほど離れたところにあった。マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。

21～22 節 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」

- もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに・・・病人を癒やすことはできても、死んでしまったらイエスの力も及ばない、という理解
- あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになる・・・イエスを、神から遣わされたお方、キリストであると信じている、ということ
- 今でも・・・弟が死んでしまった今でも

2. イエスはマルタに、「あなたの弟はよみがえる」と宣言したが、マルタはわからない

23～24 節 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」

- 終わりの日のよみがえりの時に・・・ダニエル 12:2 の預言。イスラエルにとって「国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時」が来て、そのあと信者たちのよみがえりがあるという預言。よって、マルタは、イエスが今ここで弟ラザロを生き返らせてくれるとは期待していない。

25～27 節 イエスは、彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」

- 「わたしはよみがえりです」と言われてもなお、マルタは期待していない。

C. マリアとの対話とラザロのよみがえり (28～44 節)

1. イエスは、マルタを帰らせて、妹のマリアを呼び出した

28～31 節 マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。マリアとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。

2. マリアと会って、墓に向かった

32～38 節 a マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。イエスは涙を流された。

ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないうようにすることはできなかったのか」と言った。イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。

- 見えない人の目を開けた・・・前年の秋の仮庵の祭りでの奇跡、生まれながらの盲目の人の目を見えるようにした出来事を指す。ヨハネ 9 章。
- 霊に憤りを覚え、心を騒がせて、再び心のうちに憤りを覚えながら・・・これらの表現はいずれも、イエスが怒ったことを示す。

3. ラザロのよみがえり

38b～41 節 a 墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」 (→ 4 節)

そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくだ

すると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」

そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

D. ユダヤ議会はこの奇跡を無視した (45～53 節)

1. マリアといっしょにいて、ついて来ていた人たちの多くが、イエスがしたことを見て、イエスを信じた。しかし、何人かは指導者層の人たち（パリサイ人たち）のところに行き、このことを知らせた (45～46 節)

2. 議会の召集

47～48 節 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」

3. 議長・大祭司カヤパによるイエス暗殺の決定 (ヨハネ 11 : 49～53)

49～53 節 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。

- イエスが国民のために死のうとしておられる・・・国民＝イスラエル、イザヤ 53 章の成就
- 散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられる・・・離散したイスラエルを約束の地へ帰還させること。イザヤ 11 : 11～16、41 : 8～13 などの成就
- ヨハネの福音書が書かれた時期は、第一次ローマ・ユダヤ戦役の後。紀元 70 年にエルサレムは陥落し、神殿は破壊されていて、もうエルサレムも神殿もなかった時期である。イスラエルの世界離散は始まっていたわけであるが、ガリラヤ地方にはまだユダヤ人は残っていた。その後、かの地からユダヤ人が徹底的に追放されるのは、第二次ローマ・ユダヤ戦役 (紀元 131～135 年)、通称「バル・コクバの乱」による。